

地域教養を考えるために

遠藤 史

小学校の頃のことだから記憶の細部はすでに不明瞭だが、筆者の生まれ育った長野県では、「郷土」というコンセプトに立脚した教育が精力的に行われていたように思う。それは単なる呼び掛けではなく、ある程度体系的な取り組みだった。

今でも覚えているのは国語と理科の教科書だ。長野市に本部を置く信濃教育会という民間団体の作った教科書で、書かれている内容も地域的な題材のものが多かった。たとえば国語の教科書の場合、県内を舞台にして、各地域の風物を盛り込んだ文章が載っていた。理科の教科書には、県内それぞれの地域の気温と降水量を比べる課題があったように記憶している。県内の北部は豪雪地帯で、スキーというウィンタースポーツが楽しまれているらしいとか、軽井沢というところは快適な夏と比べて、冬は非常に寒いらしいとか、たわいもない感想を抱きつつも、想像は県内全域に広がっていった。

当時はまだ「総合的な学習の時間」がない時代ではあったが、この分野に関しては、社会科を中核に据えた教科横断的な学習活動が存在していた。中心となるのは県歌「信濃の国」である。国語の時間には歌詞の解釈が披露され（「信濃の国」は明治33年に成立した曲で、歌詞は小学生には難しい文語である）、並行して音楽の時間には歌唱指導が行われる（4番が独立した叙情的な旋律で、音楽的に多少複雑だ）。もともと地理教育のために作られた歌という経緯もあり、歌詞はとりわけ社会科と相性が良い。1番と2番は地理の総論、3番は産業、4番は観光、5番は歴史、6番は近代の発展、と続く歌を覚えていくうちに、自分の暮らしている小さな町が、この世界の中でどういう位置づけにあるのか、少しずつ理解が進んでいくようだった。

碓氷峠に鉄道が開通した時点で終わっているこの6番の歌詞を受けて、高学年の社会科では郷土の現在を扱った副教材を学んだ。この頃になるとグラフや表も読めるようになってから、県の産業の将来像のような話題も何とか理解できる。5年生の秋になり、鉄道を利用した県内一周の遠足を経験すると、県内各地の風物に親しみを覚えて、自分でも教科書を超えた内容に触れてみたくなり、島崎藤村「千曲川旅情の歌」に付けられた歌曲（弘田龍太郎作曲）を譜読みしたりした。堀辰雄の小説や、立原道造や津村信夫の詩集、佐藤春夫の『佐久の草笛』を読むようになるのはまだ先の話だが、そこに至る軌道はすでにこの時点で敷かれていたに違いない。

ここまで長々と子ども時代の思い出を書き連ねてきたのは、別に回想録を書くという意図ではない。自分なりに「地域教養」というものについて考えを進めてみたいのである。和歌山大学の教養教育に新しく登場したこの「地域教養」とはどのようなものであるべきなのだろうか。そしてこの「地域教養」から何が得られるのだろうか。確たる答えを現時点で出せないことは分かっているのだが、それが何であるのかを考えるために、ともかくも助走を試みてみたい。

助走の第一歩としてまず、漢字だけで構成されたこの「地域教養」という単語をパラフレーズしてみよう。自分の趣味にすぎないのかもしれないが、筆者は漢字ばかりが仰々しく並ぶ単語を好まない。個々の概念を十分に吟味せずと並列しているような、固着した思考の有り様を想起させるからだ。「地域」と「教養」という、この二つの概念がどのような関係にあるのか、解きほぐしてみることが必要ではあるまいか。

「地域」と「教養」の関係としては、二つの方向性が設定できるだろう。第一の方向性は、地域からの教養である。もう少しパラフレーズして、地域から得られる教養と言ってもよい。この方向性のもとでは、矢印は地域から出発して教養に至る。教養教育の実践の形に具体化するなら、地域から得られる様々な分野の知見を学ぶことによって、自らの教養を深めていくということになるだろう。本学においては、教養教育とは「人間になる教育」(the art of being a human)の謂だから、地域から得られる様々な分野の知見を学ぶことによって、人間的な成長を、ひいては成熟を目指すというプログラムが考えられる。

このように考えるなら、この方向性における「地域教養」は、教養教育の全体的なプログラムに対立するものではないことが理解できるだろう。そればかりか、最終的なゴールを人間的な成長・成熟と想定する点で、伝統的な教養教育の考え方にもよく適合するものではないだろうか。ただし、伝統的な教養教育のもとで求められてきたのは、より包括的な、あるいはグローバルな知であったことは注意しておく必要がある。したがって、「地域教養」を教養教育の全体的なプログラムに適合させるためには、地域から得られる様々な分野の知見について、一般論に安易に収束させないような、細やかな気配りを持った取り扱いが求められる。

筆者が専門とする言語学を例に取ろう。教養教育としては、人間の言語としての一般的特徴や、世界の言語の系統や分布などが伝統的に期待される話題である。一方、「地域教養」として扱うのに適した分野としては、地域の様々な方言がある。方言に関する現象には地域特有の地理的・社会的文脈が関与することが多いからだ。安易な一般化ができないことも多いのだが、逆から見れば、これをきっかけにして、地域の豊かな地理的・社会的文脈に触れていけるような分野だ

と言えよう。

第二の方向性は、地域のための教養である。もう少しパラフレーズして、地域をより豊かにするための教養と言ってよい。この方向性のもとでは、矢印は教養から出発して地域に至る。教養教育の実践の形に具体化するなら、人間的に成長した学生たちが、あるいは人間的な成長を追い求める学生たちが、積極的に地域と関わることによって、地域に新たな視点を提案し、地域をより豊かなものにしていくというプログラムが考えられる。

この第二の方向性には、とりわけ大学にふさわしい教育プログラムを生み出せる可能性がある。上で筆者が回想したような、小学校での「郷土」の学習は、確かに地域社会のメンバーとしてのアイデンティティ形成には役立った。しかし、学習者自身が地域社会のメンバーであるという限界も手伝って、地域に対しての具体的活動にはつながりにくかった記憶がある。しかしこれと比べれば、大学生はより大人であり、実行力もある。大学生の地域での活動は地域社会に対してそれなりのインパクトをもたらすだろう。もっとうまく行けば、その大学生自身が将来、地域で就職したり起業したりすることで、地域社会の新たなメンバーとして定着する可能性すらある。

どの地域社会を取っても、内部には複雑に絡み合った諸要素がある。とすれば、地域の諸問題に向き合うということは、総合問題を解くようなものだ。経済活性化の視点だけから解こうとしても、あるいはインフラ整備や、観光の視点だけから解こうとしても、必ずしも期待された成果を得られない場合がある。この状況はしかし、個別の専門知を超える総合的視野をもって地域と向き合うという貴重な機会と考えることもできる。本学はすでに、COC+プログラムという形で、地域に貢献する総合的な知の実践活動を積み重ねてきている。この分野を本学の教養教育の中に上手に統合することができれば、「地域教養」のこの第二の可能性についても、より本格的な発展が期待できるだろう。

言うまでもないことだが、この二つの方向性は往還的であり、互いに高めあうものである。たとえば、地域から様々な分野の知見を学ぶことによって人間的に成長した（第一の方向性）学生は、地域に積極的に関わり、地域をより豊かにしようとする（第二の方向性）。しかしおそらく、ここでいくつかの困難に直面することになるだろう。それは具体的課題であるかもしれないし、社会的・心理的な困難であるかもしれない。それを解決しようとして学生は、習い覚えた専門的知識を適用するが、期待した成果は得られない（専門知を超える契機）。ここに至って学生は、地域のことをより深く知ろうとするだろう（第一の方向性）。さらに専門知に、成熟した人間としての力を加え（教養の発動）、より真摯な態度

で、地域により真剣に向き合おうとするだろう（第二の方向性）。

英語で「地域の」を意味する形容詞を辞書で探してみると、regionalとlocalの二つに当たる。このうちregionalは、社会的・行政的区分における地域（region）から派生した形容詞であり、個々の専門分野が対象とする地域はこちらの概念に近いだろう（たとえば和歌山県の交通網整備や福祉政策のように）。これに対してlocalは、ものがとが生起し、人間が生きる現場（locus）と関連した形容詞であり、「地域教養」が対象とする地域はこちらの概念に近いだろう。人がそれによって生かされ、また逆に、人がそれをより良く生かしていくような、生きる場としての「地域」と真摯に関わる教育が求められている。